

# 大谷光真 本願寺派 主が研究発表

宗教倫理学会研究会

## 核廃棄物は倫理的宗教的に問題

東日本大震災の復興支援と原子力エネルギーへの宗教者の対応を考える宗教倫理学会（高田信良会長）の研究会在20日、京都市下京区のキャンパスプラザ京都で開かれ、浄土真宗本願寺派の大谷光真門主が発表。寺院が復興支援をするにも門信徒らとのつながりを強くする日頃の活動が大事とし、使用済み核燃料の処理方法がない原子力発電について子孫に廃棄物だけ残すのは「倫理的宗教的に問題」と述べた。

「社会の危機に際して、できること―教団、信者市民」と題して大谷門主は「本願寺住職、本願寺派門主ではありませんが、その公的発言ではない、そこには出てこない日頃つぶやいていることをお話し致します」と私的発言と前置きして発表。

寒川旭著『地震の日本史』を挙げ、「まあ、日本は本場に地震が多い困った」と驚きを表明した上で、東日本大震災が「未曾有の災害」と言われたことに反論。「日本列島が今日成り立つためには人類の時間で計れるような期間ではない、長期にわたって地震変動が起こってきた島ですから未だかつてあらずなんてあり得ない。ただ私が知らなかった、最近の私たちが知らなかったに過ぎない」とした。



「社会の危機に際して、できること」と題して発表する大谷光真門主

てにならないこの世を生きていかなければならない」とし、「避けることはできないが減らすことはできない」と防災意識を高める必要性も述べた。

大震災にもかかわらず昨年4月9日から親鸞聖人750回大遠忌法要を予定通り執行したことについて触れ、「大遠忌はご命日の法要。いわゆるお祝い事ではない。むしろ悲しい辛い出来事を受け止める。遠慮する法要ではない。やろうとする

側）に立って話をした」と明かした。同派の震災復興については宗勢調査を基に「門信徒で定年退職して余力のあるような方々にお願いのするのが一番可能性が高い」とし、「そのためには日頃からお寺とのつながりがあり、皆で何かしようという意見がまとまるようでないといけない。お寺の平生の活動が関係している」と日頃の活動の重要性を挙げた。

野田佳彦首相が「私の責任で」と大飯原発再稼働を決めた件にも言及し、「原発で事故が起こったとして、たとえ現職でも引退する以上の責任はない。辞めていけば申し訳ないということではない。こんなことで責任を取ったことになるのか」と批判した。

今回の研究会は同学会が3月から進めてきた「3・11以降の社会と宗教」をテーマにした研究プロジェクトの5回目。本願寺派関係者など百数十人が聴講した。